日本精神保健社会学会

平成 22 年 12 月 14 日

THE JAPAN ASSOCIATION OF
MENTAL HEALTH SOCIOLOGY
＜日本学術会議学術研究団体 No.1001＞

事務局：東京都豊島区西池袋 2－39－8
ローズベイ池袋ビル 3F
東京メンタルヘルス株式会社内
TEL 03-3986-3220　FAX 03-3986-3240

ニュースレター第 41 号　　発行人：宗像恒次　　編集人：窪田辰政、上田敏子

第 16 回日本精神保健社会学会学術大会を終えて

第 16 回学術大会実行委員長
大坂市立大学大学院生活科学研究科教授　当学会副会長
畠中 宗一

第１６回学術大会は、２０１０年１１月１３日、中央大学駿河台記念館６２０号室で開催された。今年度のテーマは、「メンタルヘルスの成長アプローチ：他者報酬型社会から自己報酬社会へ」であった。午前中に６本の自由報告が行われ、総会後、今年度のテーマで、市民公開シンポジウムが行われた。シンポジストと報告テーマは、それぞれ潮田英子氏（株式会社エヴァ）「メンタルヘルスとセクシャリティ」、大山泰弘氏（日本理化学工業株式会社会長）「部下の育成や成長と会社経営」、窪田辰政氏（静岡産業大学）「学生のモチベーションを育む授業の実践」、柿岡文彦氏（公立高等学校校長）「新しい枠組みの高校教育の模索」であった。潮田氏は、セックスカウンセリングの立場から、相談者の９割が女性であること、他者と自分を比較する発想法の問題を指摘され、価値基準を自己に置くことの重要性を提案された。大山氏は、全従業員７４人中５５人の知的障害者（そのうち５割は重度障害者）を雇用し、国内３１％のシェアを占める業界トップである企業の背景を、禅僧の「人間は皆愛されることを求めています。その愛は、誉められ、役に立ち、必要とされてこそ得られるもので、保護される福祉施設ではなく、企業で働いてこそ得られるものです」ということばに触発されたと語られた。またマニュアルではなく、彼らの理解力に合わせる職人文化の重要性を指摘された。窪田氏は、テニスの授業における工夫のなかで、学生の自己効力感を高めた実践研究を報告された。柿岡氏は、中途退学者を減らすために実践されてきた、互恵的な学習集団の形成による成長、内省的な自己理解と自分育てによる成長、教師の成長の促しについて語られた。ファシリテーターとしての宗像会長は、テーマの副題とからめて、競争モデルから共生モデルへの志向として纏められたが、潮田氏は、セクシャリティに関しては、ネット情報によって他者報酬型志向が増幅されていると指摘された。全員参加型のシンポジウムは、多様な発言によって盛会のうちに終了した。

第 17 回日本精神保健社会学会学術大会・総会のお知らせ（第 1 報）

●　開催日　平成 23 年 11 月 12 日（土）　●　会場　東京都内を予定

2011 年度学会資格研修会のお知らせ

第 24 回：上田敏子・窪田辰政

●開催日：平成 23 年 2 月 6 日（日）　●会場　東京メンタルヘルス研修室（予定）

●研修内容「初歩から学ぶ統計」

第 25 回：宗像恒次①

●開催日：23 年 3 月 19 日（土）～3 月 20 日（日）　●会場　東京近郊

●研修内容「SAT コーチャートレーニング・ベーシック」

第 26 回：武藤清栄①

●開催日：平成 23 年 5 月 29 日（日）　●会場　東京メンタルヘルス研修室（予定）

●研修内容「メンタルヘルス―その営業とプレゼン」

第 27 回：宗像恒次②

●開催日：平成 23 年 7 月 9 日（土）～7 月 10 日（日）　●会場　東京近郊

●研修内容「SAT コーチャートレーニング・アドバンス」

第 28 回：宗像恒次③

●開催日：平成 23 年 9 月 10 日（土）～9 月 11 日（日）　●会場　東京近郊

●研修内容「SAT コーチャートレーニング・マスター」

第 29 回：村上章子

●開催日：平成 23 年 10 月 9 日（土）～10 月 10 日（日）

●会場　東京メンタルヘルス研修室（予定）

●研修内容「リスニング力を強化するための講座」

＊詳細につきましては、事務局へお問い合わせください。

機関誌「メンタルヘルスの社会学 Vol.17」の原稿募集

年報編集委員会では、会員の皆様からの原著論文を募集しております。また、総説、研究報告、実践報告、短報、研究ノート、資料等もお待ちしております。論文の書式は年報の執筆要項をご覧ください。原稿締切は 7 月末となります。

●送付先　東京都豊島区西池袋 2－39－8　ローズベイ池袋ビル 3F
東京メンタルヘルス株式会社内　日本精神保健社会学会事務局

●送付方法　電子メールの場合：jamhs1993@yahoo.co.jp（テキストまたはワードの添付）
FD または CD-ROM の場合：郵送にて（DOS･V フォーマット）

学会 HP アドレス変更のお知らせ

この度、本学会では独自ドメインを取得いたしました。下記のアドレスとなりましたので、ご確認ください。

http://www.jamhs.org/

学会資格研修会参加者の声

職場のメンタルヘルス研修の感想

新留　光一郎

今、世の中は大変厳しい状況にあります。経済は落ち込み、倒産、リストラ、自殺など目を覆いたくなるような状況が増加傾向にあります。多くの企業が厳しい状況に置かれ、日々その対応策に追われているのが現状です。生産性や利益を上げるために、人件費削減、コスト削減など限界以上のことが強いられ、相当な過酷な労働条件下で働いているという現状もよく聞きます。こうした職場では人間関係は崩れやすく、多くのストレスや問題が発生しやすくなります。

今回の研修では、こうした社会背景を基に職場のメンタルヘルスがいかに重要であるか、また事例検討という作業を通し、そこに潜む様々な問題やその解決方法のヒントを学ぶことが出来ました。特に人間関係の希薄化は、業務全体にとっても大きなマイナス要因になるということ、故に働く人達の健康確保がいかに重要であるか、またその為に何をすべきなのか改めて理解できました。例えば、昨今の労働契約法の制定や、労働基準法・労働安勢衛生法の改正は、「労働者の心の健康」がいかに重要であるかを顕著に表しており、また最近の裁判判決事例においても、業務に起因しての問題は、安全配慮義務違反が適用されるということを見ても確認することが出来ます。

私はこの二日間の研修で学んだ多くの事を、是非今後の職場のメンタルヘルスに役立てたいと思います。また、講義内容と数多くの事例検討から、私自身、物事に対し多面的な捉え方が可能となり、考え方に多少余裕が出来たように感じます。この事がストレスへの気づきにも繋がればと思います。最後に、わかり易い講義をして頂いた先生と、参加し共に学んだ方々へ心から感謝申し上げます。

『職場のメンタルヘルス推進担当者養成講座　アドバンス』を受講して

大島　章子

『職場のメンタルヘルス推進担当者養成講座　アドバンス』［１０月３０、３１日・於東京メンタルヘルス研修室（池袋）］を女性３名、男性３名で受講した。

事例検討としてテキストにある事例について討論し、一部はロールプレイを行った。事例はどれも出会いそうなことで、受講生各人の知識・経験を基にした様々な視点からの活発な

討論が行われた。ロールプレイでは、事例の文章に、討論の内容による肉づけがなされ、活き活きと場面が表現された。その一つ、すぐきれる上司のもとでノイローゼになりかけている人からの相談の事例では、きれる人になりきった受講生と、相談員役の武藤先生とのロールプレイが、私自身の経験を鮮やかに浮かび上がらせた。ローパフォーマーの事例では、相談員役の受講生の言葉掛けに､ローパフォーマー役の武藤先生から気持ちが吐露された所で、相談員役から状況に合った提案が出された展開に圧倒された。メンタルヘルスを推進する教育講習の依頼を受けたという事例では、複数回のプログラムを考え、討論が盛り上がった。武藤先生から『べき論』よりも、寸劇で現場を再現して参加者の心をつかみ、心を開いて話してもらえるようにするという話と具体例が出され、ロールプレイを１人で行う発想とその具体的なイメージがもてた。

メンタルヘルスの推進にはメンタルな状態を感じる心、相談者や事業所の上層部、外部機関等との関係を作れる人柄、構築力、演技力等スキル、加えて社会状況や法律、統計、医学の進歩等、推進者として必要な知識を正確に提示できる事など、多くの事が必要だ。それらのことを学び、気がつくと所定の単位に相当する内容を学ばせていただいていた。私自身は反省点もみつかった。

高い意識をもって集まった受講生が武藤先生を少人数で占有する、贅沢な講座だった。そこで得たものをそれぞれが今後メンタルヘルス推進に役立てていく、それが確信できる講座だった。

関連学会情報

～第 6 回国際保健医療行動科学会議に参加して～

上田 敏子[1)] 窪田辰政[2)]

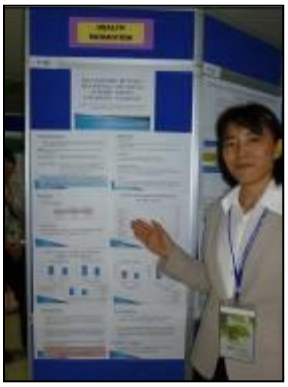
[1)] 筑波大学大学院 [2)] 静岡産業大学経営学部

2010 年 9 月 19 日～21 日の 3 日間にわたり、マレーシアのクアラルンプールにあるマラヤ大学にて「第 6 回国際保健医療行動科学会議」が開催された。本会議は「持続可能なヘルスプロモーションに向けて―well-being のケアと human security の環境についての対話―」と題し、各国の研究者、専門家より最新の研究成果が発表された。ポスター発表に参加した筆者による会議の様子を報告する。

国際学会会場（マラヤ大学）

１日目の招待講演では、D.マーサー氏（ユネスコ USHAP）より、地球規模の公共保健政策の必要性をはじめ､現代の生命科学の発展と倫理観について問題提起がなされた。続いて、B.ウィンガー氏（Murray Mallee コミュニティ保健サービス）からはオーストラリアにおけるアボリジニ女性のナラティブの事例が紹介された。

講堂（マラヤ大学）



ポスター発表の様子

基調講演では、谷口文章学会長より環境が人々の健康にもたらす影響にふれ、持続可能なヘルスプロモーションのための環境教育の必要性や今後の公共保健政策の在り方について提言がなされた。

大学構内に設けられたポスター会場では、大学構内に設けられたポスター会場では、ヘルスプロモーションからナラティブ、宗教・教育・リスクマネジメントといったセッションごとに発表が行われた。筆者は「RELATIONSHIP BETWEEN SELF-DENIAL AND SOCIAL SUPPORT AMONG UNIVERSITY STUDENTS（大学生の自己否定感とソーシャルサポートとの関連）」と題し、自分に対する否定的なイメージである「自己否定感」の強い学生は、家族や学校の先生、友人からの情緒的なソーシャルサポートの認知が低いという結果について発表した。参加者からは自己否定感の強い学生への対応の必要性について共感するという意見も聞かれ、今後の研究をすすめる上で貴重な意見を頂くことができた。

2日目のワークショップでは、「宗教的催眠方法」と「ナラティブ・アプローチ」に参加した。宗教的催眠方法ではアナス氏（アイアン大学）より一定のリズムを奏でる宗教音楽によるリラックス効果についての発表があった。「ナラティブ・アプローチ」のセッションでは、中川晶氏（大坂産業大学）より、事例の紹介を通して語りをどのように導いてゆくか、その手法に関する発表がなされた。

本会議では、持続可能なヘルスプロモーションに向け、地球環境に対する私たち人間のあり方や、私たち「生命」のあり方をどう考えてゆくべきか、地球規模の対策の必要性が提起された。私たちが何を尊び、何を志向した社会を目指すべきかは、本学会が社会に問いかけるメッセージとも共通しており、本会議への参加を通してヘルスプロモーションの視点から社会を問い直すことの必要性を再確認することとなった。